



TITLE:

中國小說史略考證 第二十九 序跋及補訂

AUTHOR(S):

中島, 長文

CITATION:

中島, 長文. 中國小說史略考證 第二十九 序跋及補訂. 中國文學報 2009, 78: 136-180

ISSUE DATE:

2009-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/180327>

RIGHT:

中國小說史略考證 第二十九 序跋及補訂

中 島 長 文

『中國小說史略』題記全集第九卷三頁
一九三一年七月の訂正版で加えられた。以後の各版間に異
同はない。

鹽谷節山教授發見元刊全相平話殘本及『三言』、并加考察
新版全集注云、鹽谷節山（一八七八—一九六二）鹽谷溫、
字節山、日本漢學家。著有『中國文學概論講話』等。他在
所著「關於明的小說『三言』」一文中、介紹了新發見的元
刊全相平話五種及『三言』（載一九二四年日本漢學雜誌
『斯文』第八編第六號）。

『日記』一九二六年十月三十日云、收辛島君所寄『斯文』
三本。

鹽谷文が載った『斯文』第八編第六號は大正十五年九月の

發行だから、この三本の中にそれがあつたのではないかと
思われる。『魯迅藏書目錄』日文部分期刊に「『斯文』第八
編五—七號、第九篇一、三號五冊」とある。また與辛島驍
書信 261231 云、「先日斯文三冊及三國志演義拔萃を御送
り下さつて有難ふ存じます。」とある。またこのころ馬廉
は、最初『改造』に載り、後で『斯文』に補訂されたこの
文を、周作人等の助けを得て中國語に抄譯し、「明代之通
俗短篇小説」として『孔德月刊』第一・二期（一九二七・
四—五）に發表している。

即中國嘗有論者 増田涉譯本『支那小説史略』岩波文庫戰
後版の口繪には、「中國嘗有論者」が「鄭振鐸教授之」と
する魯迅の原稿寫眞が掲載されている。

與増田涉書信 350610 云、『支那小説史』のぜいたくな裝
訂は私の有生以來、著作が立派な着物を着た第一回だらう。
私はぜいたく本を嗜む。到底ブチ・ブルの爲か知ら。

鄭振鐸君は支那の教授類中、よく勉強し働く人だが今年
燕京大學からおひ出された、原因不明。純學問的著作を餘
りに出版しても近頃はよくないらしい。出版しない教授連

は怒るから。古今中外の（文學上の）クラシクを收羅して『世界文庫』を出して居る、一月一冊。近い内に一カ年分惠曇村へ送るつもり、中に『金瓶梅詞話』（連載）あり、併し所謂「猥褻」な處は削されて居るだらう。しからざれば、出版を許さないそーだ。

増田氏と魯迅との遣り取りで、題記中の「鄭振鐸教授」が話題になったのだらう。

増田氏『魯迅の印象』角川選書版七十二三頁云、魯迅の文章は含みが多くて、アテこすりのものを言っている場合が少なくない。（中略）そのようなことのひとつとして今でも記憶しているが、彼の『小説史略』訂正版の「題記」の中にこんなところがある、「中國にかつて論者があつて、朝代をもつて區分した小説史があるべきだと言つたのは、殆ど膚泛（淺薄）の論ではない」（あるいは「殆ど」に照應して「ないだらう」と譯せる）。この「題記」の原稿はわたしがもらったので今でも手元にあるが、原文では少しちがつて、「中國にかつて論者があつて」のところを、ハッキリ鄭振鐸教授が言つたとその姓名が書いてある。と

ころがこれが印刷になるとき、その鄭振鐸教授が自分の名が出ていることを知つて、名前を出さなくてくれと申し込んできた。それで校正のとき「かつて論者があつて」と改めた。ちよつと見ると、鄭振鐸の説に彼が同感しているように讀めるし、どうしてその名前を出したがないのですかと私は彼にきいてみた。すると「殆ど膚泛の——淺薄の論ではない」というのは實は「淺薄の論だ」ということになる、だから當人が嫌がつたのだと説明してくれた。私は狐につままれた氣であつた。だが「殆ど」という文字は肯定するでもなく否定するでもないあいまい性をあらわすのだからそう説明をきくと、そういうことになるのかもしれない、という程度に私にも考えられはした。だが實はそれは「殆ど」という文字について詮議立てすればそうなるというだけのことで、「殆ど」があつてもなくても同じで、文章では肯定形だが、心理では否定形であつたのだ。というのは原文をよく見ると、「殆ど」という文字はアトから挿入している（はじめは「固より」としていて、後から黒くそれを塗りつぶし、「殆ど」を入れている）。だから書く

ときは「殆ど」がなくても「淺薄の論」だというつもりで「淺薄の論ではない」と文字としては書いたのだ。いわゆる「文法」も何もあつたものではなく、「淺薄でない」という言葉が「淺薄だ」という意味になつていてということ、こういう言外の含みは我々にはどうにも解らないもので、これをあげつらつたところでしょうがないのだが、とにかく含みの多い文章を彼が書いたということのやや極端な一例として思い出す。

『日記』一九三〇年十一月二十日云、夜開始修正『中國小説史略』。又十一月二十五日云、夜改訂『中國小説史略』訖。

改訂を終えたその日の夜にこの「題記」を記し、そしてそれは一九三一年七月發行の所謂訂正版の卷頭に載せられた。

「序言」全集第九卷四頁

初版に附され、「任其事」を「執筆賦墨」に作るが、合訂再版で現行のごとくなる。「又慮鈔者之勞也」の「慮」を、三版から七版まで「慮」に誤るほか、「于」を「於」

「麤」を「粗」に作るなど異體字の使用はあるものの、テキストの異同はない。

『魯迅藏書目錄』西文部分中國文學云、Grube, Wilh. Geschichte der chinesischen Literatur. Leipzig, C.F. Amelangs Verlag, 1902. xii, 467p. 22½cm. (Die Literaturen des Ostens in Einzeldarstellungen. 8. bd.)

ベルリン大學の教授であつたウィルヘルム・グルベの著書、全十章からなる書で、その最終章が戯曲と小説の記述に宛てられている。小説は『今古奇觀』と蒲松齡の『聊齋志異』に觸れるのみで、他の作品に關する記述はない。主に『聊齋志異』の香玉の話（會校會注會評本卷十一）を紹介する。小説の記述は全書四百六十頁の内僅か十四頁に過ぎない。

『魯迅藏書目錄』西文部分中國文學云、a history of chinese literature h. agiles

これはケムブリッジの教授ハーバート・A・ジャイルズの著書。エドムント・ゴッスが主編した『Short Histories of the Literatures of the World』シリーズの一冊、一九

○一年ロンドンS William Heinemann の出版。全八巻、朝代別の記述で、小説は最初元代の項つまり第六巻の第三章で説かれ、『三國志演義』、『水滸傳』、『西遊記』が扱われる。明代の第七章では、『金瓶梅』、『玉嬌梨』、『列國志』、『鏡花緣』（著者は明代の作品と考えた）、『平山冷燕』などを扱い、とりわけ『列國志』と『鏡花緣』は例文を引いて解説する。清代第八巻では『聊齋志異』と『紅樓夢』を論じ、特に後者についてかなりの紙幅を割いている。全書四百四十頁の内、小説の記述に七十六頁を宛てているから、取り上げた作品は少ないけれども、當時の文學史としては比較的眼配りが利いている方である。『鏡花緣』の引用文など、『史略』と同じ所を引くが、魯迅がこの書からどんなヒントを得たのかは分らない。

當時日本人の書いた中國文學史で小説に言及したものには次の書がある。そのうち小説戯曲の専史ではおそらく世界で最も早かつたと思われる笹川の『支那小説戯曲史』は、『史略』を含めてどこにも一言の言及もないから魯迅はたぶん見なかったであろう。

笹川種郎『支那文學史』明治三十一年（一八九八）博文館

笹川種郎『支那小説戯曲史』明治三十年（一八九七）東華堂

久保得二『支那文學史』明治三十六年（一九〇三）早稻田大學出版部

中國人の手になる中國文學史は『史略』成稿までに幾つかのものが出版されている。

黃人『中國文學史』（一九〇四？）國學扶輪社 東吳大學堂課本

林歸雲『中國文學史』（一九〇四、一九〇六）講義本

（陳玉堂『中國文學史書目提要』）

林傳甲『中國文學史』（一九一〇）武進謀新室 京師大學堂國文講義本*

曾毅『中國文學史』民國四年（一九一五）上海泰東圖書局

吳梅『中國文學史』（自唐迄清）（一九一七）北京大學三年級講義本*

謝无量『中國大文學史』民國七年（一九一八）上海中華書局

朱希祖『中國文學史要略』（一九二〇）北京大學*

*印のついた書は最近陳平原氏によつて復刻された。

『早期北大文學史講義三種』（二〇〇五年北京大學出版社）がそれである。そのうち吳梅の文學史は總論部分を影印、附録の例文は省いてある。

この中で黃人の最初期の文學史は例文を含むので膨大な書である。それは戯曲には論及するが、小説についてはわずかに最後の二頁に明代の小説の記述があるに過ぎない。それでも著者が戯曲小説に造詣の深かった人だけにそれへの言及は特記すべきことであらう。魯迅がこれを見たかどうかは分からないが、幸い現物を見ることが出来たので、その小説部分、それも明の章回小説について述べるだけだが、その記述を全文引くことにする。

黃人『中國文學史』近世「明人章回小説」云、有明一代之史。多官樣文章。胡盧依樣。繁重而疎漏。正與宋史同病。

私家記載。間有遺軼可補。而又出于個人恩怨。及道路傳聞。若夫社會風俗之變遷。人情之□漓。輿論之向背。多見于通俗小説。且言禁方嚴。獨小説之厲言十九。手揮目送。可自由抒寫。而內容宏富。動輒百萬言。莊諧互引。細大不捐。非特可以芻蕘補簡冊。又可爲普通教育科本之資料。雖或託神怪。或墮猥褻。而以意逆志。可爲人事之犀鑑。蓋勝朝有種種積習。爲治亂存亡之原動力者。史多諱而不言。可于小說中彷彿得之。略舉如下。

(一) 不平等。專制之毒。未有劇于明者也。君主威福。過于上帝。諸臣雖身登三事。列清要。而以奴隸畜之。盜賊待之。夷僂髡鉗。惟意所施。故明之士夫。未有不受刑辱者。而受刑辱者。君子尤多于小人。非億說也。試觀有明卿相之受誅。不數倍閹寺嬖幸乎。而士夫則乙科以上。對于編氓。皆得而魚肉之。大僚之對于下吏。亦皆得操其生死榮辱。重重壓力。成此弱肉強食世界。故小説人物。每假一巨閥。遭讒罹禍。駢首夷族。其裔流爲奴隸。或潛艸澤。至一日得志。乃盡殺其仇家以報。且以嘯衆暗殺爲忠義。淫奔賄選爲佳話。蓋怨毒之甚而出此也。

(一)科舉毒。明人昧登高第若遇舉。故有一種遺傳科第熱。脩德立行。爲科第也。讀書攷古。爲科第也。傾軋標榜。鑽營苞苴。爲科第也。卽名人宏製。出其餘瀋。而必高談時藝。重科第也。不得則如在九幽。一得卽直騰霄漢。泥金報捷。則貧者富。弱者強。死者亦幾可復生。尤重進士第一人。謂是入閣省捷徑。蓋世奇榮狀元宰相四字。奔走顛倒一世之人。其實明之狀元。不論才品。多以門蔭募金得之。朝廷亦以俳優待之。閣臣亦絕無古宰輔價直。不過天子之外記室。爲閹人司禮秉筆之副而已。然舉世瞋然不惜也。其現象可于小說中驗之。

一迷信。學仙奉佛及崇奉因果應報。已思想最高矣。以星命堪輿爲方計。以狐鬼胥祥爲故實。故神怪小說。最爲社會咸歡迎。

一奢淫。明時無藩鎮分歛。及金總繪之歲輸。故物力稍紓于唐宋。而侈風起焉。宮廷倡之。上行下效。一命以上中人之家。必有園林聲伎之奉。縉紳無論矣。一土豪一遊士。以至胥吏僕御。亦器用飾金銀。家人曳紈綺。消耗既鉅。立致窮困。則設法取足。于是上婪賄。下中飽。弱者用詐。強者肆

力。而宵人之獵食。常遍于江湖。□徒之禦人。不絕于都市。以間謀爲業。而釀成倭虜之巨創。以嘯聚營生。而卒召闖獻之革命。彼小說中以采蘭贈芍爲佳話。以揭竿斬木爲英雄。非喪心焉。實有慨乎其言之也。

故當時有心之士。多著小說。又喜評小說。而文學家中通俗小說。遂與八股傳奇鼎峙。茲舉最普通流行而容積亦較富者。略著于下。

(一)歷史小說 羅貫中有十七史演義今惟三國隋唐兩書最著□三代南北朝五代兩宋皆市儉點竄 郭勛使人作英烈傳敘祖英功觀晉爵

(二)家庭小說 以醒世姻緣及金瓶梅爲最著

(三)軍事小說 北征錄及平倭記稍雅馴

(四)神怪小說 封神榜西游記(邱處機之徒著)廣素女術襲其師之書名)綠野仙蹤最宏富理想亦奇特

(五)宮廷小說 白龍魚服記(武宗逸事)驪泣志異(鄭貴妃事)頗妖冶今少傳本 祁禹傳彩女傳亦亡佚

(六)社會小說 每回一事如(今古奇觀)(拍案驚奇)(石點頭)等明時鈔寫精本備宮中講覽今故家尚有存原本者

(七)時事小説 如窮奇鏡(刺劉吉) 賣遼東傳(刺楊鶴)
計明人小説。(止就章回體言) 見于張宗子娜嬛山館記者。
有四百餘種。

林歸雲つまり林傳甲の文學史は、見ることが出來たのは一九一〇年の總論部分だけであるが、それはまったく傳統的な觀念によつていて小説に關する記述はない。ある程度の分量を以つて時代を追つて小説に言及するのはわずかに、曾毅、謝无量、吳梅の三種である。このうち吳梅のは魯迅の『小説史大略』と同じく寫印本の體裁で、聽講の學生に配られたものと思われ、陳平原氏がフランスのアカデミー漢學研究所で見つけたという代物だから、おそらく魯迅の目には入らなかつたと考えられる。となると残るのは曾毅と謝無量の市販の文學史ということになる。

曾毅の文學史は小説に關する部分が、「小説之發展」、「唐代小説之盛興」、「(元明)小説戲曲之勃興」、「清之戲曲小説」の四章で、緒論は除くとしても全九十八章の五パーセントを占めるに過ぎない。謝無量の文學史も「(前漢)滑

稽派及小説」「元之小説」の二節と「晉之歷史家與小説家」、「宋之詞曲小説」、「明代戲曲小説」、「清代之戲曲小説」の四章で、これも全體の十分の一にも及ばない。

趙氏『傍證』「序言」云、根據『魯迅日記』、一九二〇年二月一四日、錢玄同借給『三國演義』和『水滸』合刊的『漢宋奇事』二十冊、一九二一年二月二八日、張閔聲借給『青瑣高議』殘本一冊、一九二二年二月一七日、沈尹默借給『遊仙窟鈔』一部兩本、一九二三年七月七日、馬幼漁借給殘本『三國志演義』十八本、又『青瑣高議』一部。

趙氏はこれだけしか言わないが、書物を借り知識を交換しあつた友人となれば、拙編本文中にも明らかなように胡適の存在を逸するわけには行かない。趙氏がそのことを知らないわけではないが一九八四年ではまだ言及を憚つたのである。

寫印とは硝酸水溶液をインク代わりに蠟引きの原紙に毛筆で書き、それを謄寫印刷したもので、この講義録は魯迅博物館が一部を所藏する。その釋文が二種出版されている。

參照凡例。

『日記』一九二三年十月八日云、以『中國小說史略』稿上卷寄孫伏園、托其附印。

又一九二三年十二月一日云、伏園來、示『小說史』印成草本。又十二月十一日云、孫伏園寄來『小說史略』印本二百冊、即以四十五冊寄女子師範校、托詩荃代附寄售處、又自持往世界語校百又五冊。

この序言はその年の十二月出版の新潮社版初版（所謂二卷本）上卷に載せられた。

「後記」全集第九卷二九六頁

「即近時作者」の「近時」二字、初版になく合訂再版で附加された。以下各版間に異體字以外に異同はない。

朱彝尊『明詩綜』卷八十、見第十五篇12『小説舊聞鈔』。

胡適『水滸續集兩種序』見第十五篇12。又見亞東版『水滸續集』、『胡適文存』第二集、『中國章回小説考證』等。

謝无量『平民文學之兩大文豪』第一編第一章羅貫中之著述考證云、羅貫中是一個歷史小説家。相傳他從漢以後到宋朝的歷史、都做有許多部小説。從前看見南北史演義和禪真逸

史隋朝事。並說根據羅公原本、至於隋唐演義及說唐、舊刻本直署羅貫中的名字。不過經後人增刪改竄得太多了。那時小説、本是拿來公開演講、助人興趣的。那演講的人隨便增減一兩段也、也是常事。不過拿本小説、來做演講的底子、並不把來當重要的著作。所以後來就有多少大同小異的傳本。（十四頁）（中略）我們可以看見通行的羅貫中小説有下幾種。

(1) 三國志演義

(2) 水滸傳

(3) 隋唐演義

(4) 說唐傳

(5) 平妖傳

(6) 粉妝樓

三國志爲羅貫中所撰、是沒有異說的。其餘(3)(4)(5)(6)幾種、舊題都說羅貫中撰、不過被後人特別改竄得多了。祇有水滸傳一種。明代有多數人說是羅貫中作的、如郎瑛七修類稿云三國宋江二書乃杭人羅本貫中所編 因爲偶有一本、題作東都施耐庵。到金聖嘆纔硬派前七十回都是施耐庵所作。（十五—十六頁。 以上第一節羅貫中之時代及其著作）

又云、隋唐演義與說唐及粉粧樓、相傳都是羅貫中的著作。但被後人改竄得太多了。不過有地方也還看得出羅貫中的精神。這幾部書、是繼三國演義而作。也是鼓吹武力奮鬥主義的。他還有一種特點、在加倍描寫羅家的歷史。（後略）（二十九頁）

又云、（一）隋唐演義 隋唐演義和說唐、他前部份有些相同的地方。不過又有詳略。很可以拿來互證。（このあとに褚人獲の隋唐演義序の「即如隋唐志傳、粉自羅氏。纂輯於林氏、可謂善矣。」を含む部分を引く。）……隋唐志傳本是羅公原本。褚氏所據、則係林氏纂輯本。早非羅公之舊。……所以羅公原本、究竟如何。現在真是無從查考了。但除去褚氏所增艷史一部份、其餘總多有羅公原文在內。這是可以斷言。照褚氏說原本從二十八回起、則以前或是說唐舊本、或是羅公志傳原本、亦不可知。（三十一—二頁）

又云、（二）說唐 說唐舊本題廬陵羅本撰。現在通行本分前後傳。前傳共六十八回、……此書亦多所錯亂。中間文字、時有佳處、當是羅公原本。（中略）（說唐）而羅氏立功者尤多。也是見羅貫中微意所在。（三十四—五頁）

又云、（三）粉粧樓 粉粧樓這部書、共八十回。是羅貫中敘述自家先代故事的專書。書中主人、是越國公羅成之後、羅增的兩個兒子。一個叫粉金剛羅燦、一個叫做玉面虎羅焜。都有絕頂的武藝。（中略）……書中每人多有綽號。所敘江湖俠義情形及聚義、劫法場等事、已略具水滸傳的雛形。但是文詞恐被明清間人竄亂得太多。不過仍用羅公原本的事實。我們看見他著作大意。總之粉粧樓是羅貫中自序先世武德、與說唐那一類武俠演義、是有同等價值。（四十四—五頁。以上第三節隋唐演義與說唐及粉粧樓）

謝无量の『平民文學之兩大文豪』は、民國十二年六月商務印書館發行、「國學小叢書」の一冊。全百十四頁の小冊子のち民國十九年には書名を『羅貫中與馬致遠』と改めて萬有文庫に入り、さらに民國二十四年にも商務印書館から再版された。「兩大文豪」とは、小説の羅貫中と戯曲の馬致遠をいう。第一編を羅貫中に、第二編を馬致遠に充てて敘述している。

『史略』は第十五篇の篇末に、演義の末流として熊大木の『唐書演義』は擧げているが、いわゆる『說唐傳』につい

ての言及はない。知らなかったはずはないから、おそらく

類同の書として省略したのであろう。謝氏は「説唐舊本題廬陵羅本撰」と言うが、その證據をあげてはいない。『説唐』は褚人獲の『隋唐演義』を粉本にそれを敷衍して成ったと言われる。であれば羅貫中の『隋唐志傳』をもとにしているから、謝氏の言うように『説唐』にも羅氏の原文は紛れ込んでいたに違いない。しかしそれで以って『説唐』を羅貫中の書とすることはできない。まして有名人に假託するのは書貫の常套手段である。又羅貫中の原籍については諸説紛々で「廬陵」かどうかも分らない。『粉粧樓』についても謝氏は何の證據も舉げない。これは竹溪山人の「粉粧樓序」に「前過廣陵、聞世俗有粉粧樓舊集、取而閱之、始知亦羅氏纂輯、而什襲藏之、未以示諸人也」とあるところから來たのであろうが、これも僞托の可能性大である。羅貫中の原籍も不明であるのに、これらの作品の著作の微意を羅氏先代の武徳の顯彰に求めるのは、殆んどこじつけに近い。したがって魯迅は謝无量のこの書をわざわざ後記で言及したが、本文の敘述に影響するところはないと

思われる。

魏子安韓子雲輩之名 魏子安の方は一九三三年『賭棋山莊全集』を見ることによって「魏秀仁」と判明し、それによつて日本語版と第十版で記述を改めた。參照本第二十六篇7。韓子雲の方は胡適の序（亞東版『海上花列傳』）で「韓邦慶」と明らかになったにもかかわらず、訂正されていない。參照第二十六篇11。

錢玄同「余亦名『疑古』」云、（前略）況作文用白話或文言、作者本有絕對之自由、他人決無干涉之權力。去年上海某報謂魯迅兄不當用文言撰『中國小說史略』、于是迅兄將本擬用白話文撰作之『跋』、即改撰甚古雅之文言、且改稱『後記』、又不施標點符號、此實對於此輩最嚴正之態度。吾儕固不可畏老年、中年而不敢作白話文、亦豈可畏少年而不敢作文言文乎。（中略）一千九百二十五年三月十一日（一九二五年三月十三日『京報副刊』・『錢玄同文集』第二卷：一九九九年中國人民大學出版社）

錢玄同の文章は、『笑里刀』という小報に「疑古」の名で、胡適が文言で劉文典の『淮南子集解』の序を書いたことを

皮肉った文章が載ったので、それに對してその「疑古」は自分ではないという聲明の形で書かれている。儲大泓『讀「中國小說史略」札記』（一九八一年上海文藝出版社）によれば「上海某報」とは上海『民國日報』副刊『覺悟』のこと、で、「偏有人抓住魯迅用文言寫小說史這點上大作文章、進行非難。一九二四年二月八日『民國日報・覺悟』上發表了署名祝青的信、說什麼魯迅『原來文言不通』、才做白話、現在爲了『表示多能』、又寫文言了。接着漢胃（劉大白）又在同一報上發表文章、說魯迅是『用賣弄文言文的本領的方法去推行白話文、有時結果反會阻碍白話文底推行。』」と言う。儲大泓の文では片言隻句を引くだけで、詳しい内容はわからないが、「上海某報」は確定されるだろう。前者は「提倡白話文者也喜做舊體」（一九二四・二・八）、後者は「白話提倡偶作文言的影響」（同二・二・一七）である。漢胃にはこのほか同報に「白話文只能行于一時嗎」（一九二四・二・二六）という雜感もある。なお劉大白（一八八〇—一九二紹興人）は清の舉人であつたが、光復會に参加、のちには新詩の唱導者の一人となり、平易な詩を書いた。漢胃と

は彼のペンネームの一つである。『劉大白詩選』がある。増田涉『魯迅の印象』角川選書版六十七—八頁云、彼の『中國小說史略』はいわゆる古文（文語文）で書いてあるが、白話（口語文）の作家として登場し、それで成功した彼が、古文であんなものを書いたということが、どうにも不審だったので、どうして古文で書いたのですかと聞いてみたことがある。そうしたら、いまの作家には古文が書けないから白話で書くのだと惡口を言うものがあつたので、古文も書けるということを知らせるために書いた。それに古文だと簡潔に書けるから、と言っていた。私にはよくわからないが、彼の古文の造詣は大したもの、彼から見ると、清末の進士及第の祖父も文章としてはものの數ではなかったらしい。しかし明の文章はひねった書き方をしているもので、わかりにくいと言っていたが、ある人たちが明末の散文を主として集めて「珍本叢書」を出して評判だったが、それは句讀の切り方が間違っている、やっぱり今の人にはよく讀めなと言っていた。

『日記』一九二四年三月四日云、夜校『小説史』下卷訖。

又一九二四年六月二十日云、晚孫伏園來并持到『中國小説史略』下卷一百本、即以一本贈之、又贈矛塵、欽文各一轉交、又附女師校五十本亦托攜去。

日本譯本に對する著者の言葉

拙著「中國小説史略」の日本譯「支那小説史」が出版の運びに至つたといふことを聞いて大に喜んだ。併し又それによつて自分の衰退したことを感じた。

回憶すれば四五年前か増田涉君が殆んど毎日、寓齋へ來て此の本に就いて質問した。偶々當時の文壇の有様を縦談したりして愉快であつた。あの時自分にはまだそんな餘暇があり、且つもつと勉強しようといふ野心もあつたのである。併し光陰流るるが如く近頃は一妻一子も累ひとなり、書籍の収集などは殊に身外の長物となつた。「小説史略」の改訂の機縁はもうあるまいと思ふ。それで恰も此の後はどう書かないだらう年寄りが、自分の全集の出版を見てよろこぶやうに自分もまたよろこぶのではあるまいか。

だが、積習はやつぱり除き難いものらしい。小説史に關

することは時としてまだ注意を向けることもある。そのやや關係の大なる事を言へば、今年故人になつた馬簾教授は昨年殘本の「清平山堂」を顰印して宋人話本の材料を豊富にした。鄭振鐸教授は「四遊記」中にある「西游記」は吳承恩の「西游記」の摘録であつてその祖本ではないことを證明した、それは拙作の第十六篇の所説をも訂正すべきもので、その精確な論文は「尙僕集」の中に收録されてゐる。もう一つは北平で「金瓶梅詞話」が発見され今まで通行してゐた同書の祖本であり、文章は今本より粗雑だが對話はみな山東の言葉でかかれ、決して江蘇省の人、王世貞の作でないことが確實に證明された。

併し自分は改訂しないでその不完備を目撃しながら放置し、而して日本譯の出版に對してよろこんだのである。が何時かこの無精の過ちを補ふ時機のあることを願ふ。

この本は言ふまでもなく寂寞たる運命を有する本である。しかし増田君は困難を排して翻譯し、サイレン社主三上於菟吉氏は利害を顧ずして之を出版して下さつた、この寂寞なる本を書齋にもたらされる讀者諸君へとともに、自分は

心より感謝するものである。

一九三五年六月九日燈下

魯迅

(増田涉譯『支那小説史』昭和十年サイレン社版)

『清平山堂』 一九三四年馬簾は寧波の露店で天一閣舊藏の明嘉靖年間洪梗が刊行した『六十家小説』(つまり清平山堂話本)の一部である『雨窗』『欹枕』兩集の殘本十二篇を發見し、自分で『雨窗欹枕集』として影印した。それより以前一九二九年彼は北京古今小品書籍刊行會の名で日本の内閣文庫が藏する十五篇を『清平山堂話本』として影印した。これらもすなわち『六十家小説』の一部分である。『四遊記』の『西游記』 鄭振鐸の考證は「西游記的演化」で最初上海生活書店の雜誌『文學』の第一卷第四號(一九三三年十月)に發表され、後彼の論文集『徇僕集』(民國二十三年上海生活書店)つまり魯迅のいう『徇僕集』に收録された。参照第十六篇1。

『金瓶梅詞話』の發見 一九三二年山西省から出て北京に將來され、後北京圖書館に入った書。欣欣子の序があり、

そこで作者は蘭陵の笑笑生だと言う。蘭陵は今の山東省嶧縣。参照第二十篇2。

『日記』 一九三五年六月十日云、覆増田君信并寄『小説史略』日譯本序一篇、『十竹齋箋譜』(一)一本。

又一九三五年七月三十日云、買『支那小説史』一本、五元、即寄贈山本夫人。參看致増田涉信330801。

又一九三五年八月六日云、上午收サイレン社寄贈之『わが漂泊』一本、『支那小説史』五部五本、即以一部贈鎌田君。致臺靜農書信0320815云、(前略)鄭君治學、蓋用胡適之法、往往持孤本祕笈、爲驚人之具、此實足以炫耀人目、其爲學子所珍賞、宜也。我法稍不同、凡所泛覽、皆通行之本、易得之書、故遂孑然于學林之外、『中國小説史略』而非斷代、即嘗見貶于人。但此書改定本、早于去年出版、已囑書店寄上一冊、至希察收。雖曰改定、而所改實不多、蓋近幾年來、域外奇書、沙中殘楮、雖時時介紹于中國、但尙無需因此大改『史略』、故多仍之。鄭君所作『中國文學史』、頃已在上海豫約出版、我曾于『小説月報』上見其關於小說者數章、誠哉滔滔不已、然此乃文學史資料長編、非『史』也。

但倘有具史識者、資以爲史、亦可用耳。（下接第二十六篇3所引）

補訂

凡例

五、A、寫印講義本

單演義編校『小説史大略』は陝西人民出版社排印本の前に『中國現代文藝資料叢刊』第四輯（一九七九年十月）に收められている。ただし未見。

B、鉛印講義本

『日記』一九二四年四月十九日云、寄季市以『小説史略』講義印本一束、全分俱畢。

ここに「講義印本一束」というのは、まだ製本しない講義用プリントをいうので、いま北京魯迅博物館の所蔵になつてゐる許壽裳舊藏本のことであろう。

L、人民文學出版社『魯迅全集』第九卷 二〇〇五年Kの一九八一年版の注釋に訂正を加えたもの。拙稿で

中國小説史略考證 第二十九 序跋及補訂（中篇）

「新版」というのはあくまで一九八一年版であつてこれではない。なお一九八一年版全集の後、版權が切れたためか、多く單行の『中國小説史略』が出版され、管見の限りでも次の數種があるが、特に學術的に優れてゐるというものではない。

○『中國小説史略』 一九九六年三聯書店（香港）有限公司 二〇〇一年三次印刷 據一九八一年全集版

○『中國小説史略』 郭豫適導讀 一九九八年上海古籍出版社 蓬萊閣叢書

○插圖本『中國小説史略』 闕名撰「前言」 二〇〇四年上海古籍出版社 插圖本大師經典

○『中國小説史略』 周錫山釋評 二〇〇五年上海文化出版社 釋評本

○『中國小説史略』 二〇〇五年北京團結出版社 民國珍本叢刊

○『中國小説史略』 二〇〇七年江蘇文藝出版社

八、『全上古三代秦漢三國六朝史』の「史」を「文」に訂正。

第二篇

3、「一萬八千歲」は“の下に「『開元占經』卷三「天數」を除いて」を補う。

第三篇

13、寫印本引用の次に以下の文を補う。

「漢文學史綱要」第九篇全集第九卷云、小説家言、時亦興盛。洛陽人虞初、以方士侍郎、號黃者使者、作『周說』九百四十三篇。齊人饒、不知其姓、爲待詔、作『心術』二十五篇。又有『封禪方說』十八篇、不知何人作、然今俱亡。

第四篇

2、「小説的變遷」の後に次の文を補う。

「漢文學史綱要」第九篇全集第九卷云、文學之士、在武帝左右者亦甚衆。（中略）又有吾丘壽王、司馬相如、主父偃、徐樂、嚴安、東方朔、枚臯、膠倉、終軍、嚴葱奇等、而東方朔、枚臯、嚴助、吾丘壽王、司馬相如

尤見親幸。……朔臯持論不根、見遇如俳優。……東方朔字曼倩、平原厭次人也。武帝初卽位、徵天下舉方正賢良文學材力之士、待以不次之位、四方士多上書言得失、自銜鬻者以千數。朔初來、上書曰、「臣朔少失父母、長養兄嫂。年十二學書、三冬、文史足用。十五學擊劍。十六學詩書、誦二十二萬言。十九學孫吳兵法、戰陣之具、鉦鼓之教、亦誦二十二萬言。凡臣朔固已誦四十四萬言。又常服子路之言。臣朔年二十二、長九尺三寸、目若懸珠、齒若編貝、勇若孟賁、捷若慶忌、廉若鮑叔、信若尾生。若此、可以爲天子大臣矣。臣朔昧死、再拜以聞。」其文辭不遜、高自稱譽。帝偉之、令待詔公車、漸以奇計俳辭得親近、諛達多端、不名一行、然時觀察顏色、直言切諫、帝亦常用之。嘗至太中大夫、與枚臯郭舍人俱在左右、但詼嘲而已、不得大官、因以刑名家言求試用、辭數萬言、指意放蕩、頗復詼諧、終不見用、乃作「答客難」（見『漢書』本傳）以自慰諭。又有「七諫」（見『楚辭』）、則言君子失志、自古而然。臨終誡子云、「明者處世、莫尚于中、優哉游哉、與道

相從。首陽爲拙、柳下爲工。飽食安步、以仕代農。依
隱玩世、詭時不逢。……聖人之道、一龍一蛇、形見神
藏、與物變化、隨時之宜、無有常家。”又黃老意也。
朔蓋多所通曉、然先以自衛進身、終以滑稽名世、後之
好事者因取奇言怪語、附着之朔、方士又附會以爲神仙、
作『神異經』『十洲記』、托爲朔造、其實皆非也。

5、全文末に次を補う。

「反魂香の話は『博物志』卷三等にも見える。」

第六篇

2、後から三行目、『隋史』を『隋志』に訂正。

第七篇

5、「黃伯思『東觀餘論』」を引く條、余嘉錫の『四庫提要辨正』を『四庫提要辨證』に訂正。

第八篇

1、「寫印本『大略』唐代傳奇第八、九篇の構成」の後

中國小說史略考證 第二十九 序跋及補訂（中島）

に次の文を補う。

「趙景深は唐代傳奇に關する魯迅の編成について、その「關於『中國小說史略』（『中國小說叢考』）のなかで次のように述べる。「四、第八篇「唐之傳奇文上」先敘沈亞之、后敘陳鴻、最末敘白行簡、誤。『唐宋傳奇集』上の排列是對的。應該按照時代先後、先敘白行簡、次敘陳鴻、最末敘沈亞之。我們只要一看下列各篇的時代就可以知道。」と言い、それぞれの作家の作品について作成時期を考證し、次のような簡表にまとめている。

白行簡	李娃傳（七五九）	三夢記（八〇九）
陳鴻	長恨歌傳（八〇六）	東城老父傳（八一〇）
沈亞之	異夢記（八一五）	湘中怨辭（八一八）
	秦夢記（八二七）	

時代順ということでは確かに指摘の通りではあるが、ここは寫印本『大略』での異聞と逸事というジャンルの概念が尾を曳いているため、そうした區分が正當で、敘述の全體に涉っているのであれば、誤りとまで

は言えない。」

3、魯迅の「王度即王凝」説（「貞觀」十九年（六四四）の「六四四」を「六四五」に、その下の「貞觀十八年（六四五）」の「六四五」を「六四四」にそれぞれ訂正。また「なお『史略』が王績を王通の兄としながら生年をなぜ「開皇初」としたのか」を「なお『史略』が王度を王通の弟としながら生年をなぜ「開皇初」としたのか」と改め、「あるいは「初」と言うのはまだ陳が亡びず（隋の統一は開皇九年）、隋が全國統一を成し遂げていなかったがために、泛稱したのか。」を補う。

版本を補う。『廣記』卷二三〇、『御覽』卷九二一、『唐宋傳奇集』、『唐人小說』などがある。

4、寫印本の項四行を5の始めに移動、5の始めの「この部分は寫印本『大略』にはなく、鉛印本で増訂されたものである」をここに移す。

5、「莫休符『桂林風土記』引用文」の注「ただし一九二七年の『遊仙窟』序言にはこの書によったところ

は見えないから、それ以降の注意によるものであろう。」を削除。「籍貫を「深川陸渾」とするのは誤。」の後に次ぎの文を補う。「『深川』はもちろん「深州」の誤記、であれば「陸渾」は「陸澤」でなければならぬ。莫休符が「深州」と書きながら「陸渾」と誤ったとは考えられないから、「川」も「渾」も傳承の過程での誤記誤刻であろう。叢書集成初編本が據った『學海類編』本も同じように誤る。魯迅は訂正版で張鷟の籍貫をいままでの「陸澤」をわざわざ「陸渾」と改めて却って誤ったのは、この『桂林風土記』の誤刻に惑わされたものと思われる。一九二七年の「『遊仙窟』序言」で「陸渾」とするのも同じ理由によるものであろう。なお昭和五年一九三〇年上海で魯迅に會つた神田喜一郎博士は『桂林風土記』の記述を指摘された。だが、翌三一年の改訂版で魯迅はその書を引きながら何のコメントもなかったというエピソードが傳わっている（『東方學』第七十三輯昭和六一「先學を語る」）。しかし、神田博士の指摘に先立つて魯迅が「桂

林風士記」の記述を知っていたことは明らかである。

參照拙譯『中國小說史略』第八篇譯注・第一冊二〇四頁。」

8、「所引『枕中記』」の最後に、「テキストとしては、『群書類編故事』卷九にも『枕中記』の全文が見える。」を補う。

9、寫印本『大略』の注、「考證5—7を參照」の「7」を「8」に訂正。

15、「長恨歌傳のテキストを論じた部分」に、次の文を補う。「岑仲勉『論『白氏文集』源流並評東洋本』白集」（『岑仲勉史學論文集』中華書局 一九九〇年 一三七頁以下）に『廣記』所引及び通行諸本との校勘がある。」

17、『登科記考』の注に戴望舒「『唐宋傳奇集』校讀記」を引くが、そのなかの「思賜」の「思」は「恩」字の誤植、二箇所あり。

第九篇

4、「小説的變遷」の後に次の文を補う。「許廣平『魯迅回憶錄』「魯迅的講演與講課」云、「唐之傳奇文」中談到元稹的『鶯鶯傳』、其後來的各自分飛、張生解釋爲「大凡天之所命尤物也、不妖其身、必妖于人」、因而捨棄鶯鶯、社會上（時人）多許張爲善補過者云。魯迅于講解時、不以爲然、他同意有人說『會真記』是寫的元稹自己的事、目的在辯護自己、是屬於『辯解文』一類、不是爲做小說而做的。／從『會真記』魯迅又談到中國人的矛盾性。他說：『中國人（指舊文人——作者）矛盾性很大、一方面講道德禮義、一方面言行又絕不相關。又喜歡不負責任、如『聊齋』的女性、不是狐就是鬼、不要給她穿衣吃飯、不會發生社會督責、都是對人不需要負擔責任。中國男子、一方面罵『會真記』、『聊齋』、一方面又喜歡讀這些書、都是矛盾性存在之故。」

6、王讜『唐語林』注末に「原文では……「傳」字がない。」の「原文」上に「古典文學出版社本の」を補い、

「傳」を「著」に改める。またその後に「類説」卷二九では「異聞集」を引き「南柯太守傳」とする。又『群書類編故事』卷九では「大槐宮記、出于陳翰記」という。」を補う。

11、引用『太平寰宇記』注末に、次の文を補う。「事文類聚」前集卷十七、「天中記」卷九にも略引する。」

12、「唐宋傳奇集」「稗邊小綴」の次に下の一文を補う。

「許廣平『魯迅回憶錄』「魯迅的講演與講課」云、李公佐『古嶽叢經』所寫无支祁的形狀、「善應對言語、辨江淮之淺深、原隰之遠近。形若猿猴、縮鼻高額、青軀白首、金目雪牙、頸伸百尺、力逾九象、搏擊騰蹕疾奔、輕利倏忽、聞視不可久。」魯迅認為它是孫悟空的雛型。在第九篇「唐之傳奇文（下）」中、魯迅說：「明吳承恩演『西遊記』、又移其神變奮迅之狀于孫悟空、于是禹伏无支祁故事遂以堙昧也。」追源无支祁說成立之故、據魯迅說、有山下而面臨水之處、適山下有大鐵鏈、則文人爲之附會其說、謂大鐵鏈後必有被鎖的東西、這東西又必是怪物才被鎖、而能伏怪物的必是了

不起的人物。這人物是誰？則首推大禹、因禹治水故、層層推想附會而成故事。」

14、姚寬『西溪叢語』の「挾朱彈筋、李至、」を「挾朱彈、筋（疑當作肋或勒）李至、」とする。またその注「翌五年」を「翌々六年」と、また「李益の進士及第が二十歳で大暦三年、任地赴任が二十二歳で大暦五年、そして翌六年に霍小玉が死ぬ」の紀年を一年ずつずらし「大暦四年」「大暦六年」「翌七年」と訂正。

15、『登科記考』引用の後に次の文を補う。

『太平寰宇記』卷一〇七信州上饒縣の次の一條は許堯佐の傳記に關わる。「叫石在州西九十里、巨石枕江、有數十穴如口。故老相傳云、織女失纜、九石不能、上石叫、大琛山勢似遏流、其纜乃上。元和十年、觀察推官許堯佐、往來過此、因爲文敘之、名曰走石說、刊之於石、置於叫石之側。」

16、柳埤『上清傳』の項、『唐宋傳奇集』の「此篇本與劉「幽求傳」を「此篇本與「劉幽求傳」」とする。同じく皇甫枚の「非烟傳」を「飛烟傳」と訂正する。

18、汪辟疆『唐人小說』按語の「『太平廣記』四十八」を「『太平廣記』四百十八」と訂正。また「李林甫外傳」の「盧子逸史校注」（神戸市外國語大學『外國學研究』第三號『中國舊小說研究』所收）を「盧子逸史」考」（神戸外大論叢」第四十二卷第三・七號」とする。

第十篇

6、『劇談錄』の項 「四庫提要」の「劇談錄」の下に「二卷」を補う。

8、『酉陽雜俎』の項 「新唐志」の注「既出」を「藝文三 小説家類云、段成式『酉陽雜俎』三十卷」とする。

12、『北里志』の項 明鈔『說郛』の注に「崔胤が李全忠の手にかかって殺される」の「李全忠」は「朱全忠」でなければならぬ。

第十一篇

中國小説史略考證 第二十九 序跋及補訂（中島）

1、『太平廣記』引用書の数 「天平廣記引得序」の「天」を「太」と訂正。

8、寫印本『大略』の後に次の文を補う。「許廣平『魯迅回憶錄』「魯迅的講演與講課」云、關於傳奇、魯迅批評宋不如唐、其理由有二、（一）多含封建說教語、則不是好的小説、因爲文藝作了封建說教的奴隸了。（二）宋傳奇又多言古代事、文情不活潑、失于平板、對時事又不敢言、因忌諱太多、不如唐之傳奇多談時事。這一分析對我們學習很有幫助、所以聽講的時候、覺得對書本以外的實益獲教不淺的。」

10、『青瑣高議』のテキスト 「手蹟目錄」にも著録がなく失われたらしい。したがってどういうテキストなのか確かめようがない。」を抹消して、「『手蹟目錄』には北京圖書館藏と著録する。未見。」を補う。

11、『宋志』の項 「子部傳記類」を「史部傳記類」と訂正。

13、『迷樓』『海山』『開河』三記を韓偓の撰とするのは明人の妄増説に、『小説舊聞鈔』の『隋唐演義』の項

の魯迅案語を附加する。

第十二篇

2、狩野直喜「支那俗文學史研究の材料」引用後の拙注（原四頁第四行の後）に次の文を補う。「伍員入吳故事」について、丁錫根「中國小說史略箋補拾零」（一四二頁）は次のように述べる。「某氏」指劉復。他據巴黎國家圖書館所藏的敦煌寫本編成『敦煌掇瑣』、收變文・詩・曲等一〇四種、見一九二五年中央研究院歷史語言研究所刊本。」しかし『史略』の行文からすれば、他の變文の原本が大英博物館にあるように、「伍員入吳故事」の原本が「中國の某氏の所に在る」というのであって、決して劉復がパリで書き寫してきたものを指すのではない。もし劉復がほんとうに原物を持っていたとしたら、當時の彼らの關係からして、劉復は魯迅が必要とするならそれを見せていたことだろう。まして一九二三年十二月の『史略』の初版上巻はおろか、『大略』鉛印本の時點で、魯迅はすでにその

ように記しているのであるから、某氏に劉復説は成り立たない。當時劉復はヨーロッパ留學に出かけ、北京に歸ってきたのは一九二五年の夏であった。」

14、『師弟答問集』を16の文末に移す。

第十三篇

1、寫印本引用の後、「この部分前半の記述に」の「に」を「は」に訂正。

2、文末に次ぎの書簡を補う。「師弟答問集」二十六頁云、「増田問曰」148頁第二行、錯斬崔寧馮玉梅團圓兩種、亦見『京本通俗小說』中、本説話之一科、傳白專家、專家ヨリ傳シ？「魯迅答曰」yes 「專家」＝説話人」

3、王國維『大唐三藏法師取經詩話』跋の前に次の文を補う。

「宋民間之所謂小説及其後來」全集第一卷『墳』云、在日本還傳有中國舊刻的『大唐三藏法師取經記』三卷、共十七章、章必有詩、別一小本則題曰『大唐三藏取經

詩話』。『也是園書目』將「錯斬崔寧」及「馮玉梅團圓」歸入「宋人詞話」門、或者此類話本、有時亦稱詞話、就是小說的別名。『京本』通俗小說「每篇引用詩詞之多、實遠過于講史（『五代史平話』、『三國志傳』、『水滸傳』等）、開篇引首、中間鋪敘與證明、臨末斷結詠嘆、無不徵引詩詞、似乎此舉也就是小說的一樣必要條件。引詩爲證、在中國本是起源很古的、漢韓嬰的『韓詩外傳』、劉向的『列女傳』、皆早經引『詩』以證雜說及故事、但未必與宋小說直接相關、只是「借古語以爲重」的精神、則雖說漢之與宋、學士之與市人、時候學問、皆極相遠、而實有一致的處所。唐人小說中也多半有詩、即使妖魔鬼怪、也每能互相酬和、或者做幾句卽興詩、此等風雅舉動、則宋市人小說不無關涉、但因爲宋小說多是市井間事、人物少有物魅及詩人、于是自不得不由吟詠而變爲引證、使事狀雖殊、而詩氣不脫。吳自牧記講史高手、爲「講得字真不俗、記問淵源甚廣」（『夢梁錄』二十）、卽可移來解釋小說之所以多用詩詞的緣故的。

由上文推斷、則市人小說的必要條件大約有三。

- 1、須講近世事、
- 2、什九須有「得勝頭回」、
- 3、須引證詩詞。

宋民間之所謂小說的話本、除『京本通俗小說』之外、今尙未見有第二種。『大唐三藏取經詩話』是極拙的擬話本、并且應屬於講史。『大宋宣和遺事』錢曾雖列入「宋人詞話」中、而其實也是擬作的講史、惟因其繫鈔撮十種書籍而成、所以也許含有小說分子在內。（後略）

- 5、「其剽取之書當有十種」の項 「こらには先行する話本」の「こら」を「これら」と訂正。

この項の後に「宋民間之所謂小説及其後來」に引く「宣和遺事」についての言及は本篇3（補訂）に見える。」を補う。

第十四篇

- 3、「續錄鬼簿」の後に次の文を補う。「致增田涉信

361005 云、『小説舊聞鈔』序文末段の意味は御解釋の通りです。詰まり、(一)羅は元人、(二)確かにこんな人があつて或る作者の變名でないことです。」「小説舊聞鈔」再版序文云、(前略) 此十年中、研究小説者日多、新知灼見、洞燭幽隱、如『三言』之統系、『金瓶梅』之原本、皆使歷來凝滯、一旦豁然。自『續錄鬼簿』出、則羅貫中之謎、爲昔所聚訟者、遂亦冰解、此豈前人憑心逞臆之所能至哉！然此皆不錄。所以然者、乃緣或本爲專著、載在期刊、或未見原書、憚於轉寫、其詳、則自有馬廉鄭振鐸二君之作在也。一九三五年一月二十四之夜、魯迅校訖記。」「増田涉の魯迅宛の質問の書簡はたぶん失われてないのだろうが、それが羅貫中に關するものであつたことは、魯迅の返答から見當がつく。鄭振鐸のは、一九三三年『小説月報』に載せた『明清二代之平話集』(『中國文學論集』所收)、同年『文學』の「談『金瓶梅詞話』」(『痴癡集』所收)などを用いるだろう。馬廉のは一九三四年『國立北平圖書館館刊』第八卷二號の「清平山堂話本與雨窗欹枕集」

(のち中華書局『馬隅卿小説戲曲論集』所收)を云うと思われる。」

4、『魯迅藏書目錄』の説明の後に次の文を補う。

「また古本三國志通俗演義については『日記』一九二六年十一月三日に「收辛島君所寄抽印古本三國志演義十二葉、十月二十六日附郵」とある。」

6、文末に次を補う。『師弟答問集』三十四頁云、〔増

田問曰〕E. 163頁 『三國志演義』第百回ノ引用文中

……豈不知庾公之斯追子濯孺子者乎？〔就庾公之斯和

子濯孺子問〕一人ノ名デスカ？〔魯迅答曰〕皆ナ一

人ノ名デス。」

13、張無咎『平妖傳序』中第八行目の「蓋吾支龍子猶所

補也」の「支」を「友」に訂正、そして全文の後に

「參看第十八篇1。」を加える。

張序の後に次を補う。『師弟答問集』三十四頁云、

〔増田問曰〕F. 169頁 平妖傳、杜七聖ノトコロノ引

用文：①揭起臥單看時、又接不上。一枚ノキレデッ

クッタ寢具？デスカ、單ノ意味ハ？〔魯迅答曰〕只

ダ「大ナ風呂敷」ノ意。「臥」トハ掛蒲團ノ大サノ意味デ、只ダソノ「大」ヲ形容ス。單トハ「アハセ」デナイ風呂ヒキ。「増田問曰」②喝聲「疾」可霎作怪。「可霎」霎時ニシテ、忽チニノ意味ガアリマスカ？○意味ノ無キ感嘆詞カ？「魯迅答曰」可霎ヲ直譯スレバ、併シ（可）死ヌ程（霎〓殺〓死）。意譯スレバ、「疾！」ト喝シタガ實ニ變（〓妙）ナコトデ……」

14、「小説舊開鈔」の「開」字を「聞」に訂正。

第十五篇

1、「夷堅乙志序」の後に次を補う。「師弟答問集」三十六頁云、「増田問曰」173頁 洪邁ノ夷堅乙志(六)ヲ引イテ蔡居厚冥見譴ノ事ヲ云フ中ニ……未幾、其所親王生亡而復醒、……「所親王生」（親類ノ王生）デスカ？「魯迅答曰」所親トハ、シタシイモノ、ヨク相知ツテ居タモノ、ケダシ門客ダラウ」

4、文末に次を補う。「師弟答問集」三十六頁云、「増

田問曰」176頁 所創者蓋即「燈花婆婆等事」（『水滸傳全書』發凡）「之傳字」、「水滸全書」（忠義水滸全書）ノ誤植デハアリマセンカ？「魯迅答曰」「傳」ハ誤植デナイ。「全部ノ水滸傳〓刪削ヲ加ハヘナカツタ水滸傳」ノ意」

5、文末に次を補う。「師弟答問集」三十六—三十八頁云、「増田問曰」177 水滸傳の林冲ガ大雪ニ危屋ヲ出タトコロノ引文中——花槍（一種ノ農具——軍草場デ使用シタ—ヲ云フノデスカ、槍ト云フ農具（草刈）ノアルコトガ管子ニ見エマスガ）「魯迅答曰」（ヤリ）武器デス。昔シハ、ソナモノヲ、フダンニ持ツテ行イダノデショウ。「畫花槍之圖而云」葫蘆ヲケルニヨシ

「増田問曰」178 同ジク林冲ヲ絞シタ引文中——a、……炭、拿幾塊來生在地爐裏……（地爐裏）三字デ一箇ノ名詞デスカ〓地爐ノ二字デ一箇ノ名詞デスカ）「魯迅把三字云々十一字抹消、而答曰」地爐裏〓地爐ノ中、地爐トハ地面ヲ掘ツテ少々ヘコマシデ木

炭ヲ焚クモノ」〔増田畫内推門扉之圖而問曰〕b、

…把草廳門拽上、出到大門首、把兩扇草場門反拽上、

…拽上、反拽上ハコンナヤウニ解シテ可デスカ？

○内外ノ關係ガ反對ニナリマスカ？〔魯迅訂正爲

外推之圖而對後者答曰〕サウデス 支那ノ大門（玄關

ノ門）ハ皆、内ヘ向ツテ開ケルノデス。反拽トハ主

人ガ外ニ出テ門ヲ閉メルダケノ意味。普通ハ大抵人ガ

内ニ居テ閉メルノデカラ normal.

〔増田問曰〕180頁 古時有個書生、做了一個詞ノトコ

ロ a、「國家祥瑞」ハ雪ガ降レバ豐作ナリト云フ思

想？〔魯迅答曰〕yes b、高臥有幽人、吟味多詩

草ハ、高臥幽人ヲ排撃シタルモノデスカ？〔魯迅答

曰〕yes or 高臥幽人即チロノ詞ノ作者自ララフ云フモ

ノカ？〔魯迅曰〕no!

7、胡適「百二十回本忠義水滸傳序」の後に次の書簡と

附屬資料を補う。

青木正兒致胡適信（10, 2, 17）ニ、（前略）『水滸』百

回若百二十回本、我的意思無論替你熱心訪求、可是此

書訪求不然容易。如京都帝國大學支那文學研究室十數

年來訪求這書、而至今還搜得不出。你不知道、那內閣

文庫是在日本頂富儲藏稀觀漢籍的文庫、因爲這文庫

（在東京）德川氏三百年封建時代官立圖書館的遺物、

收藏也自然無比。（這文庫不許公衆的閱覽、尤爲學界

恨事。）京都府立圖書館本是偶然訪求得的、君山老師

也久所羨望的。可是不必失望、冀假我若干的時期、我

誓替你訪出來！

關於你的對於百回本的text觀察、我有一事不能同意底

地方。從我的意見、小說之起原在演史、演史使人聽的、

所以往々插入駢句和韻語、以娛俗耳。今觀察百回及百

二十回本、繁用這個手段、可見却存小說的舊觀。（我

看那「覆元殘本京本通俗小說」、也繁用這個方法、此

似可證我的意見。）金本刪除這個駢句和韻語、從文學

手段上而說、就是做一進步、從小說形式上而論、却是

損傷舊觀了。自從這個見地、我也敢說、「聖嘆改攛了

水滸了！」他的改攛癖不但「水滸」、并且「西廂」「三

國」比比皆是。他是很大膽、很不羈的一箇評家、一經

他手裡，悉做自家藥籠中的東西而改出來。他的「西廂」比明周憲王本竟不同，「三國」也比明李卓吾本異同多了。（先生曾經觀得明板「三國」嗎？京都大學研究室有一本。）（後略）青木正兒 十、二、十七。

青木正兒致胡適信（10.4.8）¹⁵（前略）我鈔的「水滸」百廿回本的凡例有效於你的考證，我很歡喜很高興了。你說將來來遊日本時要觀內府的百回本，這個不難，那時我也請要帝國大學二三教授的幫助，替你介紹內閣當局者，你若實行這個意志，來遊日本，使我見你，我當歡喜欲狂；可是那時我有一大恨事，——唉！我不會中國話，我不能和你快談。我也一遊禹域，無奈沒有因緣，跼蹐小天地，慙愧々々！

岡島璞的「水滸」譯本，木版的原本很少，可是鉛印洋裝的新本容易求得的，不久我到城市訪求一部寄上你罷！

我此時要做「日本文學史」上的「水滸」一篇小論，做成之後，在「支那學」上給你看々。那「水滸」不但在中國文學史上重要的作品，並且在日本文學史上影響很

多了；而這個現象的起點是那岡島的譯本，一出此書，多數翻案（脫胎於「水滸」）的小說追從來了。（中略）我把你惠的「英雄譜」和清（或是明板？）初的舊本百十回本較一較了，結果別寫給你知道。（後略）青木正兒 十、四、八。

「青木正兒爲胡適抄錄的『水滸傳』材料」一云，忠義水滸全書（明板百二十回本）小引

吾之事卓吾先生也、貌之承而心之委、無非卓吾先生者。非先生之言弗言、非先生之閱弗閱、或曰狂、或曰癡、吾忘吾也、知有卓吾先生而已矣。先生歿而名益尊、道益廣、書益播傳、即片牘單詞留向人間者、靡不珎爲瑤艸、儼然欲傾宇內、猗歟盛哉、不朽可卜已。然而奇其文者十七、奇其人者十三、叩爾胸中、則皆未有卓吾先生者也。自吾遊吳訪陳、無異使君、而得袁無涯氏、揖未竟、輒首問先生、私淑之盛、溢於眉宇、其胸中殆如有卓吾者。嗣是過從、語語輒及卓老、求卓老遺言甚力、求卓老所批閱之遺書又甚力、無涯氏豈狂耶癡耶。吾探

吾行笥、而卓吾先生所批定忠義水滸傳及楊升菴集二書與俱挈以付之、無涯欣然如獲至寶、願公諸世。吾問二書孰先、無涯曰水滸而忠義也、忠義而水滸也、知我罪我、卓老之春秋近是、其先水滸哉、其先水滸哉。吾笑曰、唯々、非卓老不能發水滸之精神、非無涯不能發卓老之精神、吾之事卓吾先生最久、而無涯之得卓吾先生乃最深、吾愧無涯矣。然無涯非吾、亦誰能發無涯之精神者？吾不負卓吾先生、無涯亦不負吾茲遊也。於是相視而笑、煮茶共啜、取卓吾先生敍（？）忠義水滸傳文同聲讀之、胥江怒濤、若或應答、吾忘無涯矣、無涯忘吾矣、知有卓吾先生而已矣。楚人鳳里楊定見書於胥江舟次（二印）

〔欄外批注曰、〕「小引原文往々用艸體、僕不習此體、恐有誤讀、請推讀焉。 正」

出像評點忠義水滸全書發凡（摘錄）

一、梁山泊屬山東兗州、府志作濞。稱八百里、張之也。

然昔人欲平此泊而難於貯水、則亦不小矣。傳不言梁山、

不言宋江、以非賊地、非賊人、故僅以水滸名之。滸、水涯也。虛其辭也。蓋明率土王臣、江非敢據有此泊也。其居海濱之恩乎？羅氏命名微矣。

一、忠義者、事君處友之善物也。不忠不義、其人雖生已朽、而其言雖美弗傳。此一百八人者、忠義之聚於山林者也。此百廿回者、忠義之見於筆墨者也。失之於正史、求之於稗官、失之於衣冠、求之於草野。蓋欲以動君子而使小人亦不得借以行其私。故李氏復加忠義二字、有以也夫！

〔欄外批注曰、〕「可知冠忠義二字者、始於李氏。 正」

一、古本有羅氏「致語」、相傳燈花婆婆等事、既不可復見、乃後人有因四大寇之拘而酌損之者、有嫌一百廿回之繁而淘汰之、皆失。郭武定本（即舊本）移置「閻婆」事、甚善。其於寇中去王田而加遼國、猶是。小說家照應之法、不知大手筆者正不爾々。如本內王進開章而不復收繳、此所以異於諸小說而爲小說之聖也歟！

一、舊本去詩詞之煩蕪、一慮事緒之斷、一慮眼路之迷、頗直截清明。第有得此以形容人態、頓挫文情者、又未

可盡除。茲復爲增定、或攬原本而進所有、或逆古意而
□所無、惟周勸懲、兼善戲謔、要使覽者動心解頤、不
乏□歎深長之致耳。

〔欄外批注曰、〕「二字摩滅」

一、訂文音字、舊本亦具有功力、然淆訛舛駁處尙多、如
首引一詞便有四謬、試以此刻對勘舊本、可知其餘。至
如耐之爲奈、躁之爲燥、猶云書錯；若溷戴作帶、溷煞
爲殺、溷懷爲拴、冲衝之無分、逕竟之莫辨、遂屬義乖
如此者更難枚舉。今悉較改其音綴字下、雖便寓目、然
大小斷續、通人所嫌、故總次回尾、以便翻查、回遠者
例觀、音異者別出、若半字可讀、俗義可通者、或用略
焉。

一、立言者必有所本、是書蓋本情以造事者也、原不必取
證他書。況宋鑑及宣和遺事、姓名人數實有可徵。又七
脩類纂亦載姓名、述貫中三十六天行罡、七十二地煞、
今以二文并簡并列一百八人之里籍出身、亦便覽記、以
助談資。

〔欄外批注曰、〕「發凡原有十一條、今摘錄六條。正」

中國小說史略考證 第二十九 序跋及補訂（中島）

宣和遺事（略之）

水滸忠義一百八人籍貫出身（略）

忠義水滸全書目錄

（自第二回至第七十一回、與聖嘆本同、第一回即聖嘆
本楔子、第七十一回相當聖嘆本第七十回。）

相同 （七十二）。柴進簪花入禁苑 李逵元夜鬧東京

、略異 （七三）。墨旋風喬捉鬼 梁山泊雙獻頭

、字句大異 （七四）。燕青智撲擎天柱 李逵壽昌衙坐衙

（七五）。活閻羅倒船偷御酒 墨旋風扯詔罵

欽差

（七六）。吳加亮布「四斗」五方旗 宋公明

挑「九宮」八卦陣

（七七）。梁山泊十面埋伏 宋公明兩贏童貫

（七八）。十節度議取梁山泊 宋公明一敗高

太尉

（七九）。劉唐放火燒戰船 宋江兩敗高太尉

（八〇）。張順鑿漏海鯨船 宋江三敗高太尉

（八一）。燕青月夜遇道君 戴宗定計賺蕭□

(八二)。梁山泊分金大買市 宋公明全夥受招安

『忠義水滸傳』百回本目次知之 (九二) 振軍威小李廣神前 打蓋郡智多星密籌

(八三)。宋公明奉詔破大遼 陳橋驛滴淚斬小卒

(九三) 李逵夢鬧天池 宋江兵分兩路 (九四) 關勝義降三將 李逵莽陷衆人

(八四)。宋公明兵打薊州城 盧俊義大戰玉田縣

(九五) 宋公明忠感后土 喬道清術敗南兵 (九六) 幻魔君術窘五龍山 入雲龍兵圍百谷嶺

(八五) 無宋公明夜渡益津關 吳學究智取文安縣

(九七) 陳瓘諫官爲安撫 瓊英處女傲先鋒 (九八) 張清緣配瓊英 吳用計鳩鵲梨

(八六)。宋公明大戰獨鹿山 盧俊義兵陷青石峪

(九九) 花和尚解脫緣纏井 混江龍水灌太原城

(八七) 無宋公明大戰幽州 呼延灼力擒番將 (八八) 顏統軍陣列混天像 宋公明夢授玄女法

(一〇〇) 張清瓊英雙建功 陳瓘宋江同奏捷 (一〇一) 謀墳地陰險產逆 踏春陽妖豔生奸

(八九)。宋公明破陣成功 宿太尉頒恩降詔

(一〇二) 王慶因姦喫官司 龔端被打師軍犯 (一〇三) 張管營因妾弟喪身 范節級爲表兄

(九〇)。五臺山宋江參禪 雙林鎮燕青遇故

(一〇四) 段家莊重招新女婿 房山寨雙併舊

○以下至第百零九回百回本缺之(今據岡島璞所譯

(九一) 宋公明兵渡黃河 盧俊義賺城墨夜

強人

(一〇五) 宋公明避暑療軍兵 喬道清回風燒

賊寇

(九八) (一一八) 盧俊義大戰昱嶺關 宋公明智取清

溪洞

(一〇六) 書生談笑却強敵 水軍汨沒破堅城

(九九) (一一九) 魯智深浙江坐化 宋公明報捷還京

(一〇七) 宋江大勝紀山軍 朱武打破六花陣

(一百) (一二〇) 宋公明神聚蓼兒洼 徽宗皇帝夢遊

(一〇八) 喬道清興霧取城 小旋風藏砲擊賊

梁山泊

(一〇九) 王慶渡江被獲 宋江剿寇成功

(一一〇) 燕青秋林渡射鷹 宋江東京城獻俘

百回本九一) (一一一) 張順夜伏金山寺 宋江智取潤州城

(九二) (一二二) 盧俊義分兵宣州道 宋公明大戰毘

陵郡

(九三) (一二三) 無混江龍太湖小結義 宋公明蘇州大

會垓

(九四) (一二四) 寧海軍宋江弔孝 湧金門張順歸神

(九五) (一二五) 張順魂捉方天定 宋江智取寧海軍

(九六) (一二六) 盧俊義分兵歙州道 宋公明大戰烏

龍嶺

(九七) (一二七) 陸州城箭射鄧元覺 烏龍嶺神助宋

公明

〔胡適跋云〕我作「水滸傳考證」、提出幾個大膽的假說。前得百十五回本、又得百回本的前十回、又得此百廿回之序例與目錄、於是我當日理想中推測出來的水滸原百回本、與郭武定本、都有了印證。最有趣的是我說的新百回本無有田虎王慶二寇、今此本發凡說郭武定本「於寇中去王田而加遼國」、是謬吾說。

右明李卓吾評閱水滸全書序凡例目錄、以日本京都府立圖書館藏本、摘錄。

大正十年二月二十三日

青木正兒

『水滸』百十回本

○京都帝國大學教授鈴木豹軒虎雄先生所藏的。

○每卷頭題「精鑄合刻三國水滸全傳」、每頁端却題「二刻英雄譜」。上段是「水滸」、下段是「三國志」；體制略與「漢宋奇書」同。但大本。

「欄外批注曰、」卷首目次繡像都是沒有、大概是殘缺的。

○鈴木先生看做清初的刻本；我的所見有異之、大概是明末刻的。這是甚麼原故？第一、板式類明刊俗本燕居筆記之式。此書予嘗所見某氏藏本、有日本慶長元年（萬曆廿四年）僧某的跋文、確是明刊本。第二、每卷首尾有舊藏清人的跋、或記「某年月日看起」或記「某年月日看畢」；案其年月（或用年號、或用甲子）自康熙十二年起、至十五年止。例如卷十六卷尾寫道：——

○康熙十三年寅九月廿九日晚看終

○卯六月十五夕看末篇

○康熙十五年丙辰三月水滸傳看此卷尾

就似數年之間反覆愛讀。而且此書刻板摩沙漫患、似久

經歲月的。斷不是康熙初年新「？」刻的、却是明末的。

（我想去那寫跋者數十年以前刻的、印刷在康熙初年）

「欄外批注曰、」卷二十有跋道：——「己未（康熙十八）夏六月十九日日本人山形八右衛門乞望予、『水滸傳』及『三國志』々部中文理不審之處以明詳之由雖萍水之交芝蘭一般意也、故不辭以所知示語々都文理、寔可愧々々」這個知得他是當時來住日本的商賈（跋文狠拙劣、大概是無學的商人）、可是也日本『水滸傳』輸入史上很重要的資料。

○自第一回至第九十五回與「漢宋奇書」本目次略同、行文也略相合、但不免一些有文字的出入；可知是『漢宋奇書』本水滸所本的。但『三國志』却不是、這書所收是李卓吾評本、與「金聖嘆」本文章全不同。

○今與「漢宋奇書」本比較、編目異同略如下：——

（舊本、『英雄譜』回數） （『漢宋』本）

自一回……………自一回

至二十九回……………至二十九回 } 全同。——

文中才小異

三十回……………三十回・三十一回

*舊本第三十回、新本分做二回

三十一回……………三十二回

三十二……………三十三

三十三……………三十四

三十四……………三十五

三十五……………三十六・三十七

*新本分做二回

三十六……………三十八

三十七……………三十九

三十八……………四十

三十九……………四十一

四十……………四十二

四一……………四十三・四十四

*新本分爲二回

四二……………四〇五

四三……………四〇六

四四……………四〇七・四〇八

四五……………四九

中國小說史略考證 第二十九 序跋及補訂（中島）

四回差異、以下做之

一……………一

五八……………六二・六三

五九……………六四

一……………一

七四……………七九

脫一回

七六*

七七△

八〇

*舊本七四和七六之間脫了七五回。仔細考查、

沒有落丁。（按百二十回本此間正有一回、）想

是故意省略的。新本繼承舊本的編次、而直接

回數。

△新本合做一回。所以該當舊本七十七回的、

新本有文無目、今錄舊本的題目如左——

「宋公明大戰幽州 呼延灼力擒番將第七十七

回」

七八……………八一

*舊本八十一回相當新本八十四回的題目一半不同，故錄舊本的如下——

「盧俊義分兵征討 宋公明打大關第八十一回」

一 差異三回 一

九五……………九八

以上題目兩本無大差，參看『漢宋奇書』本就好了，所以不錄。以下新本沒有的多了，

故錄舊本的題目如左——

〔欄外胡適注云，〕此處青木君誤。

舊本回數

(99) (九六) 宋公明兵渡呂梁關 公孫勝法取石祁城

(100) (九七) 李逵受困于駱谷 宋江智取洮陽城

(101) (九八) 宋公明遊夜翫景 吳學究悵帳談兵

無(102)

(103) (九九) 孫安病死九灣河 李俊雪天渡越水

(一〇〇) 公孫勝馬耳山請神 宋公明東驚山滅妖

(一〇一) 公孫勝辭別居鄉 宋頭領敕征方臘

(一〇二) 張順夜伏金山寺 宋江智取潤州城

(一〇三) 盧俊義分兵宜州道 宋公明大戰毘陵郡

(一〇四) 寧海郡宋江弔孝 湧金門張順歸鄉

(一〇五) 張順魂捉弓天定 宋江智取寧海軍

新本一一一回(一〇六) 盧俊義分兵歙州道 宋公明大戰

烏龍嶺

一一二 (一〇七) 睦州城箭射鄧元覺 烏龍嶺神助

宋公明

(一〇八) 盧俊義大戰星嶺關 宋公明智取

清溪洞

一一四 (一〇九) 魯智深杭州坐化 宋公明衣錦還

鄉

(一一〇) 宋公明神聚蓼兒洼 徽宗皇帝夢

遊梁山泊

○按此書自第一回至第六十一回之間，與百回本自第一回至第七十一回之間，相當而有十回之差。自六十二回至八十回(相當百回本自七十二回至九十回)及自百〇二

回。至。百。十。回。(百回本九十一回——百回)之間。全。合。百。回。本。篇。目。而百二十回本特多的二十回與此本特多的十回出入尤甚、可見二書皆據百回本損益的。

○此書六十一回以前省略百回本的十回、所以加算此數、也是一種百二十回本了。因為要合刻和『三國志』、省略這十回和那第七十五回。高見如何？

胡適之先生狼熱心研究『水滸』的源流、將來要做一□完全『水滸』考證；我深感他的高志、寫這調查書給他做一助。青木正兒 十、四、八。

以上「青木正兒致胡適信(10、2、17)」よりここにいたるまで、耿雲志主編『胡適遺稿及祕藏書信』(黃山書社 一九九四年二月刊 全四十二冊)の第四十二卷の收められるものによる。當時の胡適と魯迅の關係から見て、青木博士の知見は、胡適を通じて相當程度魯迅にも傳わつていたと思われる。

文末に次の文を補う。

「盛于斯『休庵影語』「西遊記誤」云、近日『續藏書』、貌李卓吾名、更是可笑。若卓老止如此、亦不成其爲卓吾也。又若『四書眼』、『四書評』、批點『西遊』『水滸』等書、皆稱李卓吾、其實乃葉文通筆也。『明清小說史料選編』四九五頁」

8、最初の『史略』各版異同の次に以下の文を補う。

「『師弟答問集』第三十八頁云、「増田問曰」182……田虎王慶在百回本與百十七回本名同而文迥別、…百十五回本ノ誤植カ?」
「魯迅答曰」ヨク覺エテナイガ、大分サウデシヨウ」

10、「小説的歴史的變遷」の後に次の文を加える。

「『談金聖歎』全集第四卷『南腔北調集』云、清中葉以後的他的名聲、也有些冤枉。他抬起小說傳奇來、和『左傳』『杜詩』并列、實不過拾了袁宏道輩的唾餘。而且經他一批、原作的誠實之處、往往化爲笑談、布局行文、也都被硬拖到八股的作法上。這餘蔭、就使有一批人、墮入了對於『紅樓夢』之類、總在尋求伏線、挑

剔破綻的泥塘。

自稱得到古本、亂改『西廂』字句的案子且不說罷、單是截去『水滸』的後半、夢想有一個「替叔夜」來殺盡宋江們、也就昏庸得可以。雖說因為痛恨流寇的緣故、但他是究竟近于官紳的、他到底想不到小百姓的對于流寇、只痛恨着一半、不在于「寇」、而在于「流」。

(中略)

宋江據有山寨、雖打家劫舍、而劫富濟貧、金聖歎却道應該在童貫高俅輩的爪牙之前、一個個俯首受縛、他們想不懂。所以『水滸傳』縱然成了斷尾巴蜻蜓、鄉下人却還要看「武松獨手擒方臘」這些戲。(後略)

12、「史略」校記」の「校」を「後」に訂正、また『小説舊聞鈔』の「前民遺老」に「民」を「明」に訂正。又この項の後に次の二文を補う。

「致胡適書信 240105 云、適之先生：前兩天得到手教并『水滸』兩種序。序文極好、有益于讀者不鮮。我之不贊成『水滸後傳』、大約在于托古事而改變之、以澆自己塊壘這一點、至于文章、固然也實有佳處、

先生序上、已給與較大的估價了。」

「『師弟答問集』第三十八頁云、「增田問曰」185「後水滸」ノトコロ……故至清、則世異情遷、遂復有以爲

「雖始行不端、而能翻然悔悟、……而其功誠不可泯」者、……括弧中ハ賞心居士ノ序文デスカ？」〔魯迅

答曰〕yes]

第十六篇

5、「師弟答問集」四一頁—四二頁」の「四一」を「四〇」に訂正。

8、「師弟答問集」に續いて「この件についてはまた本篇6引『小説舊聞鈔』按語を参照。」を加える。

第十七篇

3、「小説舊聞鈔」の説明部分「『同治山陽縣志』に言う。」の句點を讀點に換える。

第十八篇

1、文末に次を補う。『師弟答問集』四十八頁云、「増

田問曰」209 三行―四行 其封神事則隱據『六韜』

（『舊唐書禮儀志引』） 引字ニ傍線ハ不要デハアリマ

センカ？ 「又問曰」『陰謀』（『太平御覽引』） 傍線

ハ不要デハアリマセンカ？或イハイントロダクシヨ

（序文）ノ意デスカ？ 「魯迅對前後問答曰」Yes

誤植デス。」

7、『魯迅藏書目錄』の項 「日記」一九二四年八月五

日」の前に次の文を補う。

「致胡適書信20105に、『西遊補』送上、是『説

庫』中の、不知道此外有無較好的刻本。」とあるから、

魯迅が使ったのはこのテキストだろう。それは後の引

用文の對校の結果とも一致する。」

第十九篇

3、注4に引く『師弟答問集』第五十四頁222をここの文

末に移す。

第二十二篇

2、『小説舊聞鈔』の注の項 最後の一句「魯迅がどの

文集を見たかは未確認。」を削る。その後に胡適の次

の文を補う。

胡適「辨偽舉例——蒲松齡の生年考」云、盧見曾的

『國朝山左詩抄』卷四十五有蒲松齡小傳、引張元的

「蒲先生墓表」説、

卒年七十六。

張元的「墓表」全文、我那時沒見着、魯迅先生的『小

説史略』根據『聊齋文集』附錄的「墓表」、説蒲松齡

至康熙辛卯始成歲貢生、越四年遂卒、年八十六（一六

三〇——一七一五）。後來我見着上海中華圖書館石印

本『聊齋文集』（以下省稱「石印本」）、果然有張元的

「墓表」全文、説他

以康熙五十四年正月二十二日（一七一五年二月

二十五日）卒、享年八十有六。以本年葬村東之原。

又十年、爲雍正改元之三年（一七二五）、其孤將

爲碑以揭其行、而以文屬余。以余于先生爲同邑後

進、且知先生之深也、乃不辭而爲之文以表于墓。

張元于乾隆十七年（一七五二）作『漁洋感舊集』後序、自署「八十一歲老人」、是他生康熙十一年（一六七二）、蒲先生死時、張元已四十四歲、作「墓表」時他已五十四歲了。他記蒲松齡死的年月日、決無不可信之理。

但『山左詩抄』引「墓表」作「卒年七十六」、道光『濟南府志』（卷五四）也作「卒年七十六」。然而『聊齋文集』所錄「墓表」却作「享年八十有六」。究竟是那一本是對的呢？『山左詩抄』刻于乾隆戊寅（一七五八）、去張元之死（一七五六）不過兩年。盧見曾刻『漁洋感舊集』、張元替他補各人的小傳。『山左詩抄』屢引張元所作的碑傳、所以我們可以斷定盧見曾所據的「蒲先生墓表」、必是張元的原本、應該是最可信的本子。因此、我相信「八十六」是「七十六」之誤。從康熙五十四年（一七一五）上推七十六年、是崇禎十三年（一六四〇）庚辰。

去年十月我到北平、借得清華大學圖書館所藏的『聊齋全集』（以下省稱「清華本」）、其中有『文集』四冊、

『詩集』兩冊、『詩集』中有「降辰哭母」詩、中有云、老母呼我坐、大小繞身旁。……因言庚辰年、歲事似飢荒。尔年（尔字此本作「兒」、後見馬立勛抄本作「尔」、尔年即是那一年。）于此日、誕汝在北房。……

庚辰正是崇禎十三年、可以證明七十六歲之說不誤。

『文集』中有「述劉氏行實」一篇、是他的夫人的小傳、劉孺人死于康熙癸巳（一七二三）、比蒲松齡小三歲。他死時、蒲松齡年七十四歲、『詩集』中有七十四歲的詩、次年七十五歲、有過妻墓的詩。以後就只有幾首詩了、最末一首爲「除夕」、仍有悼老妻的話、大概是七十五歲除夕的詩。這也可證聊齋先生死時大概是七十六歲。

（この後胡適は中華圖書館本『聊齋文集』の『詩集』に收められる詩が、殆んど他の『聊齋詩集』に見られないことからそれが全くの偽造であることを證明する。）

我的結論是：蒲松齡生于崇禎十三年庚辰（一六四〇）、死于康熙五十四年乙未正月二十二日（一七一五年二月

二十五日)、享年七十六歳。二十年九月五日。

いま『胡適論中國古典小説』(一九八七年長江文藝出版社)による。これで『史略』が蒲松齡の享年を「八十六」とした根拠が判明した。魯迅は中華圖書館石印本に據ったのである。胡適のこの文は一九三二年三月の『新月』第四卷第一號に載ったから、『史略』第十版の訂正には間に合つたはずだが、おそらくそのまま見過ごしたのであらう。

第二十三篇

3、引用の『師弟答問集』の前に次を補う。

「『師弟答問集』七十二頁云、「増田問曰」八股 ヲ解シ易ク教ヘテ下サイ

成化二十三年會試樂天者保天下文起講先提三句即講樂天四股過接四句復講保天下四股復收四句作大結

宏治九年會試責難於君謂之恭文亦然每股中一反一正一虛一實一淺一深其兩兩對題兩扇立格則每扇之中各有四股次第之法亦復如之、(日知錄)

中國小説史略考證 第二十九 序跋及補訂(中島)

八股ガ頭ニ這入ラナイノデ右ノ文ニヨツテ解シヨウトシマスガドウモチンブンカンブンデ駄目デス

「魯迅答曰」『樂天者保天下』ニ就イテト云フ題目ノ答ヘ方 先ツ三句ヲ書キ、ソレハ「起講」ト云フ。ソシテ四股(＝節)ヲ「樂天」ニツイテ書ク。ソシテ又四句ヲカイト下文ニワタリ行ク。ソノ次「保天下」ニツイテ四股書ク。ソウシテ四句ヲカイト、ムスブ。(四股ニ四股ヲ加ヘバ八股)即チ八股ノ構造ハ

起講三句——題目ノ前半ニツイテ四股(即チ一扇)

——橋(＝過接) 四句——題目ノ後半ニツイテ四股(又一扇)——結句四句。(一股ノ書キ方ハ、反ヨリ正ニ、或ハ虚カラ實ニ、或ハ浅カラ深ニ這入ル様ニ書イテモ皆ナ可。)

4、『大略』寫印本は『儒林外史』の下に「第十四回」を補う。

この項の後に『大略』寫印本が引く第三回の次の文を補入する。

『大略』寫印本引『儒林外史』第三回云、胡屠戸……

進門見了老太太、……外邊人一片聲請胡老爹說話、那胡屠戶……走了出來。衆人如此這般同他商議。胡屠戶作難道、雖然是我女婿、如今却做了老爺、就是天上的星宿、天上的星宿打不得的。我聽得齋公們說、‘打了天上的星宿、閻王就要拿去打一百鐵棍、發在十八層地獄、永不得翻身、’……報錄的人道、‘……胡老爹、這個事須是這般。你沒奈何、權變一權變。’屠戶被衆人屈不過。只得連斟兩碗酒喝了壯壯膽、……走上集去。衆隣居五六个都跟着走。老太太趕出來叫道、‘親家、你只可嚇他一嚇、却不要把他打傷了。’衆隣居道、‘這個自然、何消吩咐。’說着一直去了。來到集上、見范進在一個廟門口站着、……兀自拍着掌、口裏叫道、‘中了、中了。’胡屠戶兇神一般走到跟前說道、‘該死的畜生、你中了甚麼。’一個嘴巴打將去。……范進因這一個嘴巴、……昏倒在地。衆隣居齊上前替他抹胸捶背、舞了半日、漸漸喘息過來、眼睛明亮、不瘋了。衆人扶起、借廟門口一個外科郎中跳駝子板凳上坐着。胡屠戶站在一邊、不覺那隻手隱隱的疼將起來。自己看時、

把个巴掌仰着、再也彎不過來。心裏懊惱道、‘果然天上文曲星是打不得的、而今菩薩計較起來了。’想一想、更疼的很了、連忙向郎中討了个膏藥貼着。(第三回)

引用の『師弟答問集』の後に次を補う。

『師弟答問集』第七十二頁云、「増田問曰」27/11行
餃餅Ⅱ一種ノ餡デスカ 「魯迅答曰」菓子デス。粉
デ皮ヲ拵へ、中ニ餡アリ。餅ハ大抵圓形、餅ハ「餃子
型の繪」様ナ形ヲシテ居ル。」

「又云、「増田問曰」27/8行 吉服Ⅱメデタイ服
(?)ノ意デセウガ通常服デスカ(客ト接スル時ナド
ノ) 「魯迅答曰」吉服ハ禮服デス。喪デナイトキ
ハ皆ナ吉服デ客ト會フ。通常服デスカ特別ニメデタイ
服トモ云ヘナイ」

7、文末に次の胡適の文を補う。

胡適「五十年來中國之文學」第九章云、南方的諷刺小說都是學『儒林外史』的。『儒林外史』初刻于乾隆時、後來雖有翻刻本、但太平天國亂後、這部書的傳本漸漸少了。亂平以後、蘇州有活字本、『申報』的初年有鉛

字排印本、附有金和的跋語、及天目山樵評語。自此以後、『儒林外史』の通行遂多了。但這部書是一種諷刺小說、頗帶一點寫實主義的技術、既沒有神怪的話、又很少英雄兒女的話。況且書裏的人物又都是「儒林」中人、談什麼「舉業」「選政」、都不是普通一般人能了解的、因此、第一流小說之中、『儒林外史』の流行最不廣、但這部書在文人社會裏的魔力可真不少！一來呢、這是一種創體、可以作批評社會的一種絕好工具。二來呢、『儒林外史』用的語言是長江流域的官話、最普通、最適宜。三來呢、『儒林外史』沒有布局、全是一段一段的短篇小品連綴起來的。拆開來、每段自成一篇、門攏來、可長至無窮。這個體裁最容易學、又最方便。因此這種一段一段沒有總結構的小說體就成了近代諷刺小說的普通法式。『胡適文存』第二集

第二十四篇

- 5、『譚瀛室筆記』を『譚瀛室筆記』に訂正。
9、王國維『紅樓夢評論』第五章「餘論」の注記の後に

中國小説史略考證 第二十九 序跋及補訂（中島）

次の二文を補う。

「師弟答問集」八十二頁云、「増田問曰」297／2行王國維（靜庵文集）且詰難此類、以爲「所謂『親見親聞』者、亦可自傍觀者之口言之、未必躬爲劇中之人物」也。「未必躬爲劇中之人物」〳讀者〳親見親聞者？

「魯迅答曰」ヨ。躬〳「紅樓夢」作者自身

「増田又問曰」コノ文章ハ王國維ノ言フ所ヲ著者ガ可トシ或ハ是トシタモノデアリマスカ？（王説ニ讀成？）

「魯迅答曰」王説ヲ否トスルノデス。」

「増田涉『魯迅の印象』角川選書版七十四頁云、ついでに『小説史』のなかからもう一例をあげる。それは『紅樓夢』のところで、袁枚が『紅樓夢』は曹雪芹の撰だと言っていると『隨園詩話』を引用し、袁の「記するところはその見聞である」とし、「而して世間には信じるものが特に少ない」と言い、すぐつづけて「王國維はまたこの類を難詰して、『いわゆる親しく見、親しく聞いたというのも、傍觀者の口からそれを

言えるので、いまだ必ずしも自らが劇中の人物ではないのだ」と言った」ということがボツンと出ている。

王國維がそんなことを言った——というだけの話で、何だか前後の關係から考えて、大してそんなことを入れる必要もなさそうに思えるし、入れた王の言葉そのものもわけのわからぬようなものだし、とにかく私にはその意味がわかりかねた。だからこれはどういう意味ですかときいてみた。すると彼は、「實は王國維のそういう批評の仕方をほくは非難しているのです」と言った。しかし卒然と讀むと非難しているようにも感じられないし、とにかくわけのわからないところだ。だいたい彼は王國維のもつて回ったあんな主情的な、一人よがりの批評というものを好まないことが話しているうちにわかった。それで『紅樓夢』批評家として知られた彼をちよつと登場させて、蹴とばしたというだけの話だ。だがこれも文章だけについてみると非難も何もしていない、「こう言った」と彼の言葉を引用しているだけだ。こんなことのわからなさは、我々に

はどうにもならないものだが、とにかく彼の文章は言外の含みをかなりもったもので、前の例でみたように、「文法」的とは正反對の意味をもつ文章すら書いたということは、一應知っておいていいかと思う。字義にのみ拘泥する訓詁學者というのは、このような例からもわかるが、一般的にどうもあまりアテにはならない。」

第二十五篇

12、第二十三回引用文の後に次を補う。『師弟答問集』八十八頁云、「増田問曰」319頁3行 雙陸馬弔——吊トスベキデハアリマセンカ？（○發音ノアテ字デアルカラ、ドチラデモ可？）〔魯迅答曰〕弔ハ古字、吊ハ後起字、二字同一デス。〕

第二十六篇

2、文末に次を補う。『師弟答問集』九十四頁云、「増田問曰」323頁①行 面龐黃瘦 龐ハ如何ナ意味デセウ、

面ガ瘦セテ高イ?。○「面龐デタダ面ノ意?」〔魯

迅答曰〕龐ハ、龐大ニ隆起、顴骨ノ部分デ、ダカラ、
頬ヲ指スノデスガ一般ニハ「顔」全部ヲ意味スル。コ
コニモ顔ノ意味デス。」

6、文末に次を補う。『師弟答問集』九十四頁云、「増

田問曰」326頁④行「……就書中『賈雨村言』例之、

：賈雨村ハ書中ノ人名デスカ?人名ナラ——(傍
線)ガイリマセンカ?」〔魯迅答曰〕「賈雨村言」ハ

「假語村言」ト同音、「拊ラヘタ物語、俗ナ言葉」ニ
ナルノダカラ旁線ヲ引イテモイイガ引カナクテモ可ナ
リ

〔増田又問曰〕同頁末カラ②行 叢桂ハヨク他ニモ見
マスガ、叢ハ桂林ノ意味デスカ?。○木犀ノコトヲ叢

桂ト云ツテ單ナル桂ト區別シタノデスカ?

〔魯迅答曰〕桂ノ多數、一本以上ノ桂樹デスガ、桂林ノ様ニ
大キクナイ

〔増田又問曰〕327頁末カラ⑤行 駱馬楊枝 楊ノ枝ヲ
鞭トシタコトハ何カ風流ナ事ト考ヘテ居タノデセウ

カ? (誰カノ詩句ノ中ニデモアル語ト思ヒマスガ?)

〔魯迅答曰〕(駱馬ハ墨鬣ノ白馬) 唐代ノ貴少年
ハ白馬ニ乗ツテ路側ノ柳ノ枝ヲ折ツテ鞭トスル事ハ風
流ナ事デアツタ様デス。都去也ニ皆ナスギサツタ!

又『師弟答問集』九十八頁云、「増田問曰」327頁末カ

ラ④行 禿頭回道「:」禿頭ハ渾名ニ(ハゲ)デス
カ?男?女?

〔魯迅答曰〕yes「抹消」女「而
曰」下男」

12、『史略』各版間の異同」の後に次を補う。『師弟答

問集』九十六頁云、「増田問曰」334頁末カラ⑤行

耐想拿件濕布衫撥來別人着仔、耐末脫體哉、(濕つた
シャツを別人にやる)ト云フノハ、氣持チノ惡イモ

ノヲ別人ニヤツテ、自分ハサッパリスル——ト云フ意
デセウガ、モ少シ具體的ニ云ヘバ、ドンナ事ニナルデ

セウ?

〔魯迅就(濕ツタシャツヲ別人ニヤル)句曰〕厄介
ナ事ヲ別人ニ

〔増田問曰〕「仔」——ト同ジ意デ
スカ? 〔魯迅答曰〕「着仔」——着セテ。 〔増田問

曰「原書「未」ハ「末」ノ誤リデセウ。」〔魯迅答

曰〕yes 〔耐末〕＝御前ニ至ツテハ

〔魯迅曰〕コレハ蘇州ノ言葉 御前ハ濕布衫ヲ人ニ着セテ自分ニ至ツテハサツバリニナルツモリ（想）ダラウ！ 例ヘバ或ル男ガ一人ノ女ヲ愛シタガ後ニイヤニナツタ。併シソノ女ハ中々ハナサナイ、五月蠅クナル。ココニオイテ、別ノ男ヲソノ女ニ接近サセテ女ガソノ男ニクツイテ仕舞フ工夫ヲスル。成功スルバ、自分ハ、サツバリ。

或ハ或ル人ガ或種商賣ヲ經營スル。少々損ヲスルガ大シタ事モナイ。兎角、イヤニナツタ。コンドハ或ル馬鹿ヲウマクダマシテソノ商賣ヲ讓ツテ仕舞フ。サツバリ

濕布衫ハ實ハ「濕ツタシャツ」トハ少々違フテ「ヨク乾カナイシャツ」ト意味スルノデス。

〔増田又問曰〕同頁末カラ③行 等我說完仔了啲右ノ三字「完了啲」ガ連續シテ語尾（よ）トナリマスカ？ 又ハ「說完仔了」ガ一語デ、啲ノミガ語尾デ

スカ？

〔魯迅答曰〕我方說完シテ仕舞フノヲ待テヨ 〔この文に注記して〕テ＝仔 仕舞フ＝了 ヨ＝啲 又九十八頁〔増田門曰〕三三五頁末カラ⑤行 斗門噎住。斗門ハ「煙管の圖を描き雁首を指して」ココデスカ？ 〔魯迅答曰〕雅片ノ「キセル」デス 〔自ら阿片煙管の繪を描き、阿片に點火する部分を指して〕コレハ「烟斗」ト云フ 雅片ヲツケル 斗門ニツケタ雅片ニモ小孔ヲ一ツアケナケレバナラナイ。クツレルト斗門ガフサガレル。「噎住」トハ塞ツテ仕舞フノ事。」

14、文末に次を補う。『師弟答問集』九十八頁云、「増

田問曰」336頁末カラ④行 至描寫他人之徵逐、：

〔他人〕彼等即チ他們ノ他デスカ？ 恐ラクコツチト思ヒマスガ、又ハ別人ノ意ノ他デスカ？ 〔魯迅答

曰〕他人トハ「上海名流」以外ノ人々デス」

2、「大略」鉛印本及び『史略』各版間の異同」の後に

次を補う。『師弟答問集』百頁云、「増田問曰」339頁

終カラ3行 馬從善序云、出文康手、蓋定稿於道光

中。文康、費莫氏、字鐵仙、滿洲鑲紅旗人、大學士勒

保次孫也、「以資爲理藩院郎中……」[出文康手、蓋

定稿於道光中。]馬從善ノ序云ハコレダケヲ包含スル

ノカ?。○下文ノ次孫也マデ馬ノ語カ?〔魯迅答曰

皆〕no 〔増田曰〕[出文康手]ノミデ蓋云々ハ著者

ノ意カ? 〔魯迅答曰〕yes

4、「引用文について」の異同の後に次を補う。『師弟

答問集』百頁云、「増田畫碌碌和磨而問曰」碌碌ハ

〔ドチラ?〕 〔魯迅指碌碌曰〕yes 〔指磨曰〕

no コレハ磨ト稱ス。 〔増田問曰〕關眼兒 (心棒

ハ軸ヲ插入スル穴)? 〔魯迅答曰〕yes

7、文末に次を補う。『師弟答問集』百頁云、「増田畫

有兩扉櫺子的門而問曰」346頁最末行 櫺扉ハ 〔魯迅

答曰〕文言デ言ヘバ「門」no「戸」デス。南方ノ門

○戸(實ハ門ハ二枚、戸ハ一枚、併シ今ハ混用)ハ

中國小説史略考證 第二十九 序跋及補訂(中島)

二枚ノ方ガ多イ、板デ拵ラヘ、格子ナシ、併シ形ハ大

抵、圖ノ如シ。北方ノハ一枚モノ多ク格子アリ、如下

圖(櫺子のある單戸を描くも今省略)。中央ノ一枚ハ即チ

「櫺扉」ノ上半ハ格子、下半ハ板。ソノ外面ニ又竹簾

ヲ掛ケル(冬ハ門幕)

〔増田指櫺子曰〕空間又ハ薄板? 〔魯迅答曰〕no

空間ハ紙デ張りマス。 〔増田又曰〕コンナモノヲ日

本デ格子戸ト云ヒマスガ、大體コレデセウカ? 〔魯

迅答曰〕yes (増田の繪は部屋と部屋との境の戸とする

のに對して、魯迅はそれを訂正して外開きの側が「ココハ庭

道路」とし、内部を部屋とする)

〔増田又門曰〕347頁3行 穿着簇青的夜行衣靠……

〔衣靠〕ハ衣裝 no 誤植カ?

〔魯迅答曰〕no 併シ意味ハ「衣裝」ト等シ。何故

「靠」ト云フノカ? 「俠客」達ノ用語デスカラ我們凡

人ニハ解リ難シ。

附記 拙稿「中國小説史略考證」第二十五より本篇第二十九ま

中國文學報 第七十八冊

でのために、貴重な紙幅を割かれた『中國文學報』ならびに京都大學中國文學會に深甚なる謝意を表する。二〇〇九年九月一日